

## プロセスエデュケーションを導入した安全教育への試み

福田道路株式会社 正会員 北添 慎吾

### 1. はじめに プロセスエデュケーション(ラボラトリー方式の体験学習)とは

「プロセスエデュケーション」とは、プロセスから学ぶことを支援する「場づくり」のことで、その「場づくり」と学びを促進する働きかけが「ファシリテーション」になります。講師がファシリテーターとなり、様々なアクティビティを提供して、「気づき」から「学び」へと展開していくような働きかけを行い、受講者自らが考えて学べるような、「道しるべ」を提供していくものであると考えています。

### 2. これまでの安全対策の現状と課題 死傷者は減ったが・・・

#### 禁止事項や安全装置の積み重ねによる努力で事故による死傷者数は大幅に減少した

建設業の安全対策は、立ち入り禁止措置や不安全行動など禁止行為を定めたものが中心ではあるものの、近年の様々な安全対策(様々な安全装置や現場での創意工夫)により、事故による死傷者数を大きく減らすことができました。

#### しかし、リスクは更に高くなっている(リスクホメオスタシス理論)

効果を上げてきた建設業の安全対策ではありますが、死傷者数は全産業と比較した場合まだまだ多く(全産業の約2割を占める)危険な産業というイメージから脱却できないまま、業界の若者離れなど深刻な影響が色濃く残っています。また、安全対策を書面に残す必要性が高まっていることもあり、「心」の安全対策は置き去りにされ、「書類」の安全対策が優先されてきたという側面に注意していかなくてはなりません。実際書類の多さに「現場はもう、うんざり」といった雰囲気があることも知っておく必要があります。またマニュアルや安全書類の整備、安全装置の設置などに気をとられて安全の本質が置き去りになった状態で、環境や社会情勢の変化(高齢化・高速化・高度化)に対応できないまま、潜在している高いリスクに気がついていない人がいることも忘れてはいけません。

### 3. マンネリ化した安全教育・訓練を活性化させる 「自ら」が考え「みんな」で実行できる安全へ

これまでの安全教育は、概念学習(知識伝達型・答えは学習者の外に・目標を与える・受動的・結果指向)が大半を占め、本来は体験学習(気づきの学習・答えは学習者の中に・目標を見つける・能動的・プロセス指向)であるはずの現場での危険予知活動やヒヤリ・ハット活動等がマンネリ化してしまい、若手の手本となるはずのベテランによる事故が増加しています。そのような状況に対応して、通常の労働安全に関する座学とは別に様々な工夫を行ってきました。これまでの試みを列挙すると、心理学・社会学・行動科学に加え、負の産業遺産巡り・映画「八甲田山」・畑村洋太郎氏の「だから失敗は起こる」・マイケルサンデル氏の「ハーバード白熱教室」等の映像を使用するなど、「心」を動かし自分で「考える」という仕掛けを行ってきました。

更に、土木現場で働く人達全員が高い安全哲学を身につけていただくために、「自ら」が考え「みんな」で実行できる安全教育・訓練の実現に向けてどのようにすれば良いか、斬新な手法を探していました。

### 4. 体験学習との出会い 学ぶ意欲を醸成させる

普段から、子ども向けの環境学習に取り組んでいる中で、体験学習(プロジェクトワイルド及びWETエデュケーター養成講座・こども環境アドバイザー資格講習会)の実習を受ける機会がありました。そこで知り合いになった小学校の教師から学校教育向けに開発された体験学習「プロセスエデュケーション」を紹介されました。この体験学習と教材は子どもに関わる教師や講師向けに開発されたものですが、建設現場の大人にも十分に「学ぶ意欲を醸成させるプログラム」であることがわかり、現場の安全教育に採用することにしました。

キーワード プロセスエデュケーション ファシリテーター 概念学習 体験学習  
連絡先 〒556-0011 大阪市浪速区難波中3丁目9番1号 福田道路(株) 関西支店 TEL06-6649-1389

**5. プロセスエデュケーションの導入****4時間の安全教育・訓練に本格導入**

参加者（発注者・元請・協力業者・重機リース会社・警備等のメンバー）を集め、9つの視点（個々のメンバーの様子・コミュニケーション・リーダーシップ・グループの規範・意思決定・グループの目標・時間管理・仕事の手順化・グループの雰囲気）に注意して実施しました。



写真1 課題

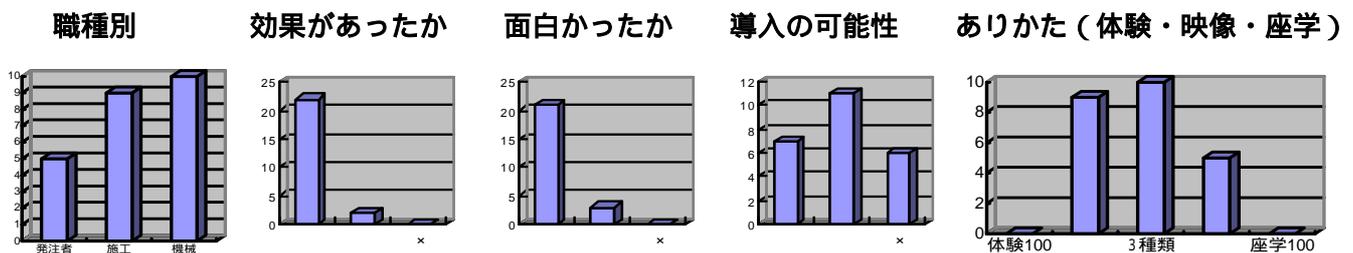
写真2 話し合い

写真3 まとめ

写真4 発表

**6. 導入の効果****受講生たちの反応とその効果（アンケート結果から）**

実施時の反応は良く、新鮮さもあってメンバーのほとんどが真剣に取り組む姿がみられ、リーダーを立てるグループやそうでないグループもあり、通常は言葉を交わさない人たちが活発に意見を交換していました。問題解決実習「めざせワールドカップ2014」で情報交換の難しさに気づき、正解のあるコンセンサス実習「安全管理のポイント」ではコンセンサスを得ることの難しさを学び、実際に発生した事故事例を元に解決策を考える実習を行い、グループ内での活発な意見交換と集約が可能になりました。下記アンケートの結果を見ても、極めて関心度が高いこと、そして座学・体験学習・ビデオといった多様な形態を望む声が多いことがわかりました。ただし、自社での導入の可能性に関してはやや困難であるとの認識が多勢を占めていました。

**アンケートの結果****7. 今後に向けての課題****活動のマナー化をどう防ぐか**

KY活動やヒヤリ・ハットといった体験型の安全活動は現在システム化されて、どの会社の書類もたいへん立派なものになっています。しかし、導入当時は斬新であった活動自体はマナー化し「書類化」しているのが現実です。いくら斬新な手法を導入しても、同じことを繰り返していればマナー化を防止できません。また現場の作業員には、人前で話すことや書くことが苦手な方が多く存在していることも事実であります。

そこで、今回教材として使用したサッカーを題材にしたゲームに高い感心を示したことなどを考えると、それらの教材を現場の人たちの趣味や指向に合わせるなどの工夫を行い、現場（経験）体験学習（気づき）座学（知識）現場（新たな経験）というサイクルの中で、受講者自らが教材開発に加わり能動的な活動を行うことができれば、常に斬新な発想で楽しい活動となり、高い効果が得られるはずです。したがって、今後は関心のある人達を巻き込んで、次代のファシリテーターを育てていくことが重要であると考えています。

**8. 今後の展開****土木事業の理解にむけて、ファシリテーターの育成と新しい教材の開発**

日頃の教育にプロセスエデュケーションを持ち込むことで、土木技術者の中にファシリテーターが育ち、土木事業への理解と関心を持ってもらうための教育が実践できるようになれば未来は明るいと考えます。今後は関心のある人達を巻き込んで、各現場にあった教材の開発はもちろんの事、子どもから大人まで幅広く対応できるような新しい学習法や教材を開発していきたいと考えています。

【参考文献】プロセスエデュケーション（津村俊充）